

理論と実践の幸福な関係

沼田 あや子（本学教職研究科教授 臨床教育学、臨床発達心理学）

理論を学んでしまうと、かえって実践がぎこちなくなる……というのは、よく聞く話です。現場のダイナミズムを前にすると、理論はしょせん理想論、机上の空論と感じてしまいがちです。でもそれではもったいないなあと思います。理論と実践がうまくかみ合わないのは、簡単に言ってしまうと、理論は「構造」で、実践は「プロセス」だからです。理論は、実存が抽象化され、ひとつの「かたち」になっています。いっぽう、実践は時間の流れのなかで行為し続ける、「未知のもの」です。

未知のものと対峙するとき、理論は勇気をくれます。私の経験では、目の前にいる子どもをどうやったら変えられるかという思いに囚われていたとき、田中昌人氏の発達理論が大きな助けになりました。院生時代に学んだときは、難解でよくわからなかったのですが、現場に出てみて、ああ、ほんとうにそのとおりだなと思いました。人間の発達には一定の規則性があり、その意味を知ること、子どもの育ちを「待つ」勇気をもらいました。

子どもには発達の質的転換期というものがあります。生後7か月ころ、1歳半ころ、9・10歳ころです。田中氏の理論でいうと、この3つの質的転換期のあいだに3つの小さな発達段階があるとされています。その時期に子どもの内面には質的変換を達成するためのエネルギーが生まれ、この内面の発達こそが重要ということです。7か月ころの質的転換を達成するためのエネルギーは4か月ころ、1歳半なら10か月ころ、9・10歳ころは5歳後半ころに生まれるということになります。

小学校の先生は、「9・10歳の壁」という言葉を聞いたことがあると思います。10歳は、ピアジェの発達理論の「形式的操作期」に入る時期です。抽象的な概念を理解し始め、想像上の問題を考えることができ始めます。学習内容も発達に合わせて変化するため、学習の壁をなかなか乗り越えられない子どもがいます。同時期に、自己を客観的・多面的に理解し始め、他者

視点も取得するため、友人関係が変化し、子どもたちにとっては大きなエネルギーを要する時期です。

この壁を乗り越えようとする子どもたちは、田中氏の発達理論を用いてみると、5歳後半から小学校3年生くらいにかけて、エネルギーを溜めてきたことになります。新しいことに出会い、吸収し、失敗しながら学び、「〇〇したい」という願いと「〇〇できた」という体験の両方を積み重ねることが、エネルギーを溜めることかと思えます。日々の小さな営みにこそ意味があるのです。そして、いざ質的転換の壁を越えるときは、はたから見れば、危なっかしく不器用で、停滞・退行したように見えることがありますが、それもまた、自然なことで、意味のある過程です。

今、皆さんが気になってる子どもは、どの時期にいらっしゃるのでしょうか。エネルギーを溜めている時期なのか、壁にぶつかっている時期なのか。疲れて小休止している時期かもしれません。発達理論によって、それが見えてくると、私の場合は、ああ、この子は今こういう時期なのだな、今が大切なんだな、と応援する気持ちが湧いてきます。子どもによっては、上のいずれかの時期が長くなることもあります。そのとき、大人ができることは、子どもの願い（意欲とは違います）を枯らさないことだけなのかもしれない……と思うようになりました。

実践とはプロセスであると冒頭で述べました。「10歳で伸びるためには、幼児期になにをさせればいいのか」という発想になると、それは実践ではありません。目的のための手段となり、構造の側面が強くなります。実践とは、子どもと大人が相互作用しながら紡いでいく行為です。その先は未知です。未知であることは不安にさせられますが、子どもにはその子なりの力があり、楽しく気持ち良く生きていれば、悪い方には行かないということを、発達理論が教えてくれています。今、あなたの机上にある理論は、きっと生きた理論になるはず。大切にしておいてください。